



第343号 平成19年2月1日

発行所 京都市学校医会

京都市中京区間之町通竹屋町下ル

楠町601-1 こどもみらい館 2階

T E L (075) 256-0351

F A X (075) 241-3568

発行人 長 村 吉 朗

AIDS 教育はこれで良いのか

会 長 長 村 吉 朗

11月に島根県松江市で開催されました第37回全国学校保健・学校医大会において、AIDS教育につき考えさせられることがありましたのでそのことにつき記載いたします。

シンポジウムの「学校医による健康教育の実践」の最後にフロアからの発言があり、その内容は私にとり非常にショッキングでした。それまでの話は聞いてはおりましたが、その発言で目が覚めたと言っても良いでしょう。ただ単に眠りから起きたと言うだけでなく、AIDS教育に対して今のままではいけないという気持ちが目覚めたのです。その基となった発言を覚えている範囲で記載いたしますと、次のようになります。「私は東京から来ておりますが、私の子供は東京の私立の医科大学の6年生になっています。卒業前に友達と4名でAIDS検査に行ったところ、行くからにはそのような覚えがあったのですが、4人の内3人がHIV陽性となりました。このような状況なのです。」何分記憶によるもので微妙な覚え違いなどはあるかと思いますが、その骨子は間違っていないものと思っております。その先生は、先生のお子様が3名の中に入っているのかは発言されませんでしたが、会場は静まりかえて質問などはもちろん無く、その後もそれについての追加発言などはありませんでした。会場にいる多くのものが、私と同様あっけにとられていたのだと思います。

今日本ではHIV感染者の新規発見が、昨年よりついに年間1,000名のラインを超えました。先進工業国の中で感染者が増加しているのは日本だけだそ

うです。本当の意味で日本が先進国かは疑問があるとは私は以前より考えておりますが、事態は気楽に考えている場合ではなさそうです。今から20年ほど前に、誰だったかは忘れましたが「AIDS患者はゴキブリと同じで、1人いれば10人いる。」と発言して、「人間とゴキブリを一緒にしてけしからん。」と問題点をすり変えた非難を浴びた方がいました。表現の仕方に問題はあると思いますが、表在化した感染者が1,000名なら実際の感染者はその数倍はいて当然です。上記の先生のお子さんのように医学的知識が有ってすらこの有様です。これまでのAIDS対策では感染者の増加を食い止めることは出来ていません。AIDSは特殊な人だけがかかる病気ではありません。今私が感染したとしたら多くの方は、彼なら自業自得だと思われるでしょうし、失う未来もそう多くはありません。しかしながら医学部の6年生と言えば長年の苦勞がやっと実り、これからの将来に大きな期待を持っているはずです。それが全て失われてしまいます。同じような思いをする人が毎年わかっていだけで1,000人も生まれてくるのです。今何とかしなければなりません！

医者として病気を治療していて、本当に無力を痛感することが多々あります。しかしAIDSは感染症であり、感染を予防することが出来ます。感染してからその結末を迎える時期を遅らすのではなく、感染さえしなければ何の問題も起こらないのです。10年前には我が国においてHIV感染者の報告は年間100名程度であり、死亡者も100名ほどでした。今1,000名の感染者がいても、死亡者は30名だそうです。

す。死亡者だけを見ると、日本ではAIDSによる死亡者は減少しているという事になります。新しい高価な薬により結末を迎える時期が遅らされているだけであるのに、本当にこのような認識で良いのでしょうか。日本人は一つのこと到大騒ぎして、その後はそれを忘れてしまいます。4年前のSARS騒ぎは何だったのでしょ。たった一人の感染者も出ていないのにあの騒ぎ、その陰でAIDSは年間1,000名以上、いえ実際はその数倍もその感染者を増やしているのに……

HIV感染を防止するには教育が必要です。今学校でAIDS教育は性教育の一貫として教育されているようです。しかしながら性教育に対して小泉前首相が否定的な見解を表明した後、性教育に対してバツ

シングとも言うべきものが起こっています。このために、子供たちを感染から守る手段であるAIDS教育が後退するようなことがあってはなりません。そのためには、AIDS教育は感染症の予防教育の一つとして、性教育とは切り離して教えていく必要があるのではないのでしょうか。またその教育の方法やその時期など、今学校医を含め関係者がその知恵を絞って方策を考えなければならない時なのではないのでしょうか。さもないと、数年後には年間10,000名のHIV感染者が出るようになってしまいます。未来に対する夢を無くした人が年間10,000名以上も生まれることが無いよう、大至急対策が必要です。

第55回 近畿医師会連合学校医研究協議会総会に参加して

常任理事 福 持 裕

平成18年11月26日に奈良で開催されました、第55回近畿医師会連合学校医研究協議会総会に出席し、大阪大学保健センター教授の井上洋一先生の「児童・思春期の心の問題と対応」と題した講演を聴講してきましたので、ご報告いたします。

当日は、午前中は所用があり、昼前に会場にきましたが、途中曇り空で、ある意味、奈良の趣のある、ようやくその気配の深まりつつある秋を味わいながら、昼前に会場にきました。会場は、近畿各地からの参加者でほぼ満席の状態でした。いじめや自殺の連鎖が社会的に問題となっている今日この頃でもあり、大きな期待で席に着きました。

(冒頭、座長が演者の紹介資料を数分間探すという珍しいハプニングがありました。)

講演内容は、

- ①今のこどもを理解するには一時代の理解
 - ②現代の児童・思春期の病理とは？
 - ③困っている目の前の子供を援助するには？一対策
 - ④こどもの世界を住みよくするには？
- という大まかな流れで進められました。

まず、①として、方丈記の鴨長明の言葉「今の世

のこと古に準^{なぞら}えて知りぬべし」という言葉を引用され、昔と現代とを比べて歴史の流れとして捉えることにより、「集団に帰属して役割を生きる自分」という人と人の関係が密な昔から、「个人中心の世の中、自分は自分」という自由な個人の現代、个人中心の時代になっているという分析をされました。

②では、現代の子どもの問題として、不登校、ひきこもり、摂食障害、いじめ、リストカット、アスペルガーといった多岐にわたる項目の現状について触れられました。それによると、不登校は昭和41年から平成10年までの30年間に、小学校が4,430名から20,724名に、中学校で12,296名から85,942名へと増加しており、最近ではほぼ横ばいの状況とのことです。ひきこもりは、26～30歳をピークに正規分布をなし、30歳や40歳台もまれではなく、20歳～40歳台の1.36%、少なくとも全国で20～60万人以上とも言われている現状とのことでした。ひきこもりの問題点として、数が多い、長期化する、将来の人生設計が立たない、自然寛解が少ない、時に精神医学的な症状が出現することもあり、多方面からのアプローチを必要とすることなどを挙げられていました。摂食障害は、Anorexia Nervosa神経性無食欲症と

Bulimia Nervosa過食症があり、当初は女性が多かったが最近では小学校でも男性でも見られるようになってきているとのことで、これらには現代の思春期の自己愛的な面が関わっていると述べられた。いじめは、異質な要素を取り上げて集団から排除しようとする集団心理であり、始まりは個人差や個性など、微妙な状況のことが多いとのことです。リストカットは、背後に不全感や無価値感、劣等感があり、切る行為が怒りや不快といった嫌な思いから逃げる行為であり、その行為に対する批判よりもその背後にある気持ちに焦点を当てる必要があるとされました。またアスペルガーをはじめとする広汎性発達障害についても触れられました。

③では、子どもに対する接し方や話し方として、大人として優位な立場からの尋問、詰問的な接し方は不適切で、教えるのではなく一緒に考えるということが大切ということでした。またすぐアドバイスモードに入らず、根拠を示せない励ましは効果がなく、相手の目線に降りた会話そのものが重要で、詳しく聞いて理解しようという態度が信頼関係を作ることとなること、自分が味方であることを伝え、隠し事をせず、感情を支持して（本人の立場に立ち）、問題の整理を手伝うに留めて結論を導かないという

立場が望ましいとのことでした。

④では、「昔はよかった」は通用しないことを十分理解し、時代にあった対応が必要であることを認識することが大切であり、学校と家族が協力して、学校が共に生きる場としての意識をもって家族同士も話し合い地域で学校を見守るという、新しい学校共同体の形成が必要ではないかと述べられました。最後に、現代のこどもの成長に必要な人との触れ合い、体験の場を与えることが必要ではないかという提言をされました。

全体として、納得できる内容ではありましたが、一般論、概念的な内容が多く、もう少し具体的な対処法などについて、聴きたかったという感想を持ちました。

会場を出る時には、雨となっていました。ようやく深まってきた秋の気配を感じつつ、帰りは奈良公園の飛火野や春日大社、ささやきの小道を経て、浮きみ堂、浅茅が原、一の鳥居から、興福寺と散策して、京都に戻りました。

平成18年度 京都市立学校定期結核健康診断の結果報告

常任理事（結核対策委員） 井 上 静 子

平成19年1月23日、結核対策委員会が開催され、平成18年度の結核健康診断の結果報告及び検討がなされました。

問診調査実施者数は、98,971人で要検討者数は409人（0.412%）でした（表1）。

ツベルクリン反応検査は7会場で6月26日～7月5日に行い、受診者280人中、66人が陽性でした（表2）。胸部X線直接撮影は、7月18日～7月24日に各保健所で行い、受診者76人中、有所見者が1人ありました（表3）。この1人については血液検査、CT等で「マイコプラズマ肺炎」との診断でしたので、今年度も結核感染者はありませんでした。

過去4年間は、結核感染者は見つかっておりませんが、種々の理由（不登校、保護者と連絡がとれない、宗教上の理由、その他）で、精密検査の未受診者がかなりありますので、これをどうするかが来年度の課題として出されました。

表 1. 問診結果

校 種	在 籍 数	問診調査 実施者数	要 検 討 者 数	要 検 討 者 内 訳			
				家族・本 人り患・ 予防内服 歴	高まん 延 国	自 覚 症 状	B C G 未接種
小 学 校	69,032	68,876	381	54	34	4	289
中 学 校	29,822	29,680	28	18	10	0	0
養 護 学 校	423	415	0	0	0	0	0
合 計	99,277	98,971	409	72	44	4	289
割 合		99.692%	0.412%	0.073%	0.044%	0.004%	0.291%
保健所問合せ後				0			

表 2. ツベルクリン反応検査

校 種	対 象 者	受 診 者	未受診者	陽 性 者
小 学 校	323	271	52	60
中 学 校	10	9	1	6
養 護 学 校	0	0	0	0
合 計	333	280	53	66

※対象者323人中 B C G 未接種289名、
高まんえん国34名
※対象者10名中高まんえん国10名

表 3. 胸部 X 線直接撮影

校 種	対 象 者	受 診 者	有所見者
小 学 校	110	69	1
中 学 校	7	7	0
養 護 学 校	0	0	0
合 計	117	76	1

※X線対象者117名中ツ反陽性者60名（注1）
ツ反未受診者53名、自覚症状4名
（注1）ツ反陽性66名のうち、高まん延国6名
は、B C G 接種済のため対象外

※有所見者は、再度精密検査（血液、C T 等）を受診し、マイコプラズマ肺炎との診断。

第21回 大文字駅伝大会

会 長 長 村 吉 朗

2月4日、京都の冬の風物詩の一つとなった感のある、第21回京都市小学校大文字駅伝大会が都大路を会場に開催されました。早朝に天気予報にはなかった雨がわずかに降り、開催前は曇っていた空も子供たちの熱気に押されたようにいつしか快晴の空となっていました。大会の結果は1位嵯峨野、2位境谷、3位柊野、4位久我の森、5位福西、6位修学院、7位桂、8位向島、9位松尾、10位向島南と、いずれも1時間を切る好タイムと接戦の大会でした。また、私の担当した第1中継所は例年スタートの際の転倒のため数人のけが人の治療をすることとなるのですが、今年は1名のけがのみでした。大会全体でも走った後気分が悪くなり、念のため医務車で運ばれた子供が1名のみでした。

昨年の報告にも子供たちの練習のしすぎによる膝や足などへの傷害についての懸念を少し述べましたが、今年は出場者の心臓検診の際に整形外科医会の全面的な協力を得て運動器検診を実施いたしました。予想では、痛みがあっても大会出場がストップされるというやだとかから、それを訴えない子供たちが多いと考えていましたが、出場予定者の半数が何らかの訴えがあり整形外科検診の対象となりました。急遽検診に当たる医師を増やしていただき、整形外科医会には本当にご迷惑をおかけいたしました。紙面を借り、お詫びと御礼を申し上げます。結果的には一

人のドクターストップも出ることなく、数名に整形外科受診の指示が出ただけで終了いたしました。私の担当した第1中継所に入ってきた児童の中に足を引きずっている子供を見かけました。今後整形外科検診に対する意見などを集計し、来年の大会にはよりよい検診体制として、こどもたちは安心して競技し、また指導者もそれを安心して見守り指導できる環境に、整形外科医会と共にしていきたいと考えております。

さて大文字駅伝に話を戻しますが、例年14名の医務班には学校医会の理事が多く出ていましたが、5年前より出場校の学校医に参加を呼びかけるようにいたしましたところ多くの賛同者を得、今回も理事はわずかな参加で済むほどとなりました。出務していただきました先生をご報告いたします。林鐘声（本部）、平位喜七郎（スタート）、長村吉朗（第1中継所）、八田一郎（第2）、岡田靖史（第3）、山下琢（第4）、俵良裕（第5）、伊藤あゆ子（第6）、渡辺一男（第7）、山内英子（第8）、上田尚司（第9）奥村正治（フィニッシュ）、青木修一郎（医務車）、大本一夫（救急車）。本当に有り難うございました。そして来年こそは医務班に出て、その熱気を直接感じたいという先生方がおられましたら、地区予選が終了する11月頃までには事務局までご連絡下さい。

第26回 京都市小学生持久走記録会

専務理事 林 鐘 声

1月21日(日)、例年のように鴨川・出雲路橋・北大路橋コース(全長1,700m)で実施されました。参加127校、参加者は6年生の2,108名(男子1,179名、女子929名)、男子は32組、女子は27組に分かれての競技となりました。京都市の6年生は11,839名(H18.5.1)ですから5・6名に1名が参加したことになり

ます。本部とスタート・ゴールを設置した2つの橋をはさむ鴨川西岸には、生徒とその父兄、学校関係者がひしめいていました。

今年も長村会長と私が医務として出務しました。ノロウイルス流行も終息し、暖冬のためかインフルエンザの流行もなく、こども達で体調を崩している

ものは少なく、気温7℃前後、風はなく、時折の日射しにも恵まれ、コース条件と併せて、絶好の記録会となりました。

医務テントを訪れたのは総勢15名でした。全身倦怠を訴えた1名には棄権を勧めました。14名は外傷に関連したものでした。スタート時の転倒の3名は、単独倒でした。以前は団子となって倒れることが多く一気に忙しくなったものでしたが、この数年、経験しなくなりました。スタートは真直ぐに走ること、スピードアップしないなどの指導が効を奏しているものと理解しています。川岸と橋との接合部での転倒、捻挫の数名も含めて、いずれも簡単な外傷処置で済ませることができました。1名、走行中に右肩痛が始まり、痛みの為に右肩拳上できないとの訴えの生徒が来ましたが、右肩甲骨内側に軽い圧痛と腫脹を認める以外に所見なく、問題の少ないものと判断

しました。後日の様子を確認をとってもらったところ、翌日には元気に登校していたようです。所見に乏しい右股関節痛を訴える生徒も来ましたが、同じく大事に至るものではなかったようです。学校での整形外科的な教育、指導があれば、医務テントに来る必要がなかったものと考えています。

発表された上位記録をみると、男子は5分55秒で10位(昨年では7位)、女子は5分56秒で6位(昨年では3位)と好記録でした。なかでも男子1位は2位と6秒差の5分40秒、女子1位は2位と15秒差の5分37秒で例年の僅差での1位と異なって、男女とも飛び抜けた記録がでたことは驚きでした。男女とも上位11名までの記録でみると、大文字駅伝出場校の生徒ばかりでした。納得はするものの残念とも思いました。

第10回 常任理事会

平成19年2月3日
於 事務局

出席者 長村会長、奥村・平位副会長、林専務理事、
井上・藤田・竹内・東道・蘆原・福持各常
任理事、星谷耳鼻咽喉科理事

・会長挨拶

<報告事項>

1. 色覚相談 1/16 (新井)
2名
2. 小学生持久走記録会 1/21 (林)
今月号参照
3. 結核対策委員会 1/23 (井上)
有所見者は、マイコプラズマ肺炎1名
4年間、結核患者なし
ツ反、X線写真を拒否する児童、生徒の対応が
今後の課題
4. ワンポイント相談 1/25 (平位)
アスペルガー症候群の児童のいる学校教員との
面談

5. その他

大文字駅伝の検診に、今回は整形外科検診を加えた

<協議事項>

1. 会計、確認について
2. 全理事会について 4/12
3. 京都市学校医会誌について
〆切りは5月の連休明け
4. 新任校医研修について 3/29
5. その他 5月の理事会は4/28に予定
・学校医を推薦する基準
・フッ化物洗口の実施3年目

<関連学会・各種協議>

1. 大文字駅伝大会 2/4
2. 精神衛生研究会 2/8
3. 腎臓相談 2/13
4. 創立100周年記念事業座談会 2/15
5. 京都市学校保健協議大会 2/20
6. 創立100周年記念事業委員会 2/22
7. ワンポイント相談 2/22
8. 平成18年度日医学校医講習会 2/24
長村、奥村の出席
9. 色覚相談 2/27
10. 次回常任理事会 3/3 2:00PM～